

ヨーロッパとところどころ	1
地球1周	3
南米へ渡航村設置地獄	4
勝又君のビルマ赴任	5
尾沢氏工博、横井氏理博	7
母校だより	9

# 千曲會報

1957年10月1日

昭和32年10月1日発行

長野県上田市帯入  
信州大学繊維学部内  
編集兼発行人 小山長雄

信州大学繊維学部内  
発行所 社団法人千曲会

昭和31年6月18日第3種郵便物認可 毎月1日発行 定価1部15円

## ヨーロッパとところどころ

小西高 雄

### ハンブルグまでの道

春まだ浅い日本の空に別れを告げ、3月初め西欧の繊維業界視察のため羽田を飛出して南方コースをとりながらヨーロッパへ約4ヶ月近くの1人旅の呑気さに気のむくまま、北は北欧3国から南はイタリーまで12ヶ国を出たり入つたり、表と裏とを交互に見聞しつつの赤毛布もどうか無事に6月の中旬暑い梅雨の季節を迎えた日本に帰りました。

兵隊の時の想出でもと南廻りのSAS機に乗つてみたらドイツまでの長距離客はたゞ1組という強行軍に今さらながら寒暑の差の極端な熱帯コースの難行を味わはして貰う。ニッパハウスのようなマニラ空港待合室のボーイの無愛想に第一番目の異国の無常を感じ、ジャム湾をすぎてタイの上空にかかる茶褐色の国土と泥色の川が目にしみてくる。田舎屋の回りにめぐらしてあるクリニックを見下しつつドンムアンの空港に入る。さすが国際空港だけあつて旅客機の数も多く、羽田から着ている冬服をもてあましたながら3月だというのに30度Cの待合室でスコールの涼を取るのも異風景です。アメリカ船のタイ空軍、ジェット機のとを追つて離陸、アンダマン海の上空に出たかと思うとビルマの首都ラングーンに着陸、近代的待合室で壁画を眺めながらロンギーをまとつたボーイの冷いココラのサービスに南国情緒を感じる。ラングーン、カルカッタ間は乗客が少く、大陸上は気流が悪いがベンガル湾は快適な飛行で思い切り手足を伸ばしてしばしまどろむ。カルカッタからは現地色濃厚なお客様も乗り込み、宗教的感覚からか機内給食の食事は手をつけず持参のわけのわからないものをしやぶり出すのには、その異臭にいざさか閉口する。水銀燈のまぶしいパキスタンの首都カラチに現地時間22時に到着、円型のガラシとした待合室の扇風機の空廻りに何かしらわびしさを感じる。アメリカンスタイルのステューワーズばかり見なれた目に印度パキスタンのステューワーズのローカルなサリーのユニホームの肩から下げた美しい房は暑熱の中の一服の清涼剤となる。真夜中にアフアソンベルトののアナウンスに飛び起きるとイランのアバダン空港で平べつたい古風な待合室でベルジャの銅器を眺めながら飲んだ本格的コーヒーをやつと眠気をさます。折からの満月にふと誘われて外庭に出てみると、コスモスの花の咲乱れに秋の訪れを感じるような深夜の涼風が頬をなで、今までの暑気をきれいに洗いおとしてくれる。アバダンの町の石油タンクがシェレフットのように美しく夜空に浮出ている中を機は欧州の玄関ロマへと九時間の最長コースに飛び立つ。折からの十五夜の月が空気のせいかとても澄んで見え、夜明け前

トルコの上空で目をさますと紺碧の地中海が視界に入ってくる。茶褐色なギリシャの上空をすぎ、伊太利に入ると幾何学的な村落の様子が文明的なセンスを表す。羽田を出て50時間3日目の朝やつとローマの上空にたどりつく。古代円型劇場や近代的な中央停車場を下に見ながらスクータ、小型自動車の走りかう市街をすぎて機は滑るように国際空港に入つてゆく。羽田からの日本人乗客もほとんどここで降り、東京からの乗組員も全部入替り機内もすっかり化粧される。さすがヨーロッパの玄関口だけあつて、ひつきりなしに到着する各国の旅客機の色とりどりのマークが南国の太陽にキラキラ光つてまぶしい。交替したばかりのフレッシュなステューワーズにせきたてられ、ふたたび機上の人となる。SAS機もヨーロッパに入つてやつと本来の面目を取り戻したように、ステューワーズも盛んに愛嬌をふりまきサービスもよくなるうちにイタリーの長靴に沿つて北進する。ゼノアの上空から大陸に入り高度を上げながら一気にアルプスをこすと、スイスの田園牧歌的風景が目の中に飛び込んでくる。緑の野原の中の赤い屋根を飛びこしてチューリッヒ空港に着き、赤地に白十字のスイス国旗を迎えられると戦争を知らない平和境ののどかさわき出るように感ずる。約1時間の小休止で再び飛びあがるとアルプスを越えてから、雲がだんだんと多くなり機体の動揺を感じ、ドイツのラインの流れもちらりちらりと雲間に望めるだけで約50分後フランクフルトに降りここでスイスエヤーの小さいDC3に乗り替え終点ハンブルグへと急ぐ。密雲の中からハンブルグの灯を見つけた時の喜び、羽田からの連続58時間は文明の利器を最大に利用したというものの、なかなか道遠しを感じます。

### ドイツというところ

戦後みちめな状態でスタートしたのに最近の西独経済の健全かつ、たくましい発展ぶりは実に目ざましいものがあります。例えば1950年末には3億ドルにみたなかつた外貨保有高はこの4月末には46億ドルと増加の傾向を示し、輸出の伸びすぎの為の国内インフレを懸念する動きのあるのは我々たちがつた結構な悩みというところなんです。最近の月輸出高も7億ドル近くの高水準を示し、ハンブルグ港にえんえんと積出しを待っているフォルクスワーゲン、オペル、ベンツ等の輸出自動車の行列にはドイツ機械工業の底力をまざまざと感じさせます。物価の動きも極めて安定的で国民生活も年々向上し完全雇用と生活水準の向上という国民経済の理想が経済の堅実な発展に裏付けられて、着々実現されてきているといううらやむべき状況が伺われる訳です。

### ドイツ人とドイツ語

ドイツ語という言葉の持つ語感の如くドイツ人は大く逞しく優美さには遠いが簡潔直裁 Ja Oder Nein、ときめつけてくる。ナショナルリズムの強い義務は履行するが権利はあく迄主張するように頭は良いが頑固で排他的な標準なゲルマン民族です。ドイツマルクのヨーロッパにおける絶対的な強さから、以前の戦勝国を完全にリードしているのは復興に対する考えの相異からきていると思われる。東洋人的考えからすれば復興はまず情緒豊かな御茶屋・映画館から始つて徐々に生産意欲を向上せしめ、それからというが、この人達は爆撃でぶち毀されたプラットホームには雨もりはじゃんじゃんするが蕭々としてつくる特別急行はピカピカに磨かれた最新型という如く、玄関位放つたらかしても基礎産業にはうんと金を入れる事がゲルマン民族の共通した観念のようです。

### ハンブルグの街角

西独第一の都会で人口百八十万欧州一の港湾都市をほこり日本からも多数の商社が駐在し四通八達した航空路を利用して気軽にヨーロッパの隅々迄走り廻っています。緯度からみれば北緯50度カムチャッカに当る様な北の国で到着のごとの完全な冬景色が5月に入り市街の中心をなすアルスター湖の水がぬくもり出すと花という花が一時に咲き乱れワグネルも南から帰つてきて、アルスターに白鳥が浮んで春の訪れを告げる。駅前のメンケ通りも完全に復興し、色とりどりの商品が美しく飾られてある。繊維品の高価なものには高売柄柄感に感じ中級ワイシャツで円価3000円位、吊下げのレデーメードの洋服で3万円というところ。3軒おき位に煙草屋が並び、日本の様な小さい店ではなく堂々たる店構えで、これでよく商売が出来るなと思う位、紙巻10本入85円が一般価格でその割に葉巻は1本50円も出せばよく、安く感ずるが、ドイツ人は税金を喫つてるといふとぼやいているのも似たような事。通りの中程にドイツ一の大きな写真機店があり愉快な事にはこのシエール親父が日独混血で、いらいつしやい。と東京弁でまくしたてられると錯覚をおこそうです。訪欧の日本人も一度は訪れ在留日本人はクラブみたい利用し何時行つても日本人にお目にかかれるようです。

ハンブルグ港をなすエルベ河を車で30分飛ばすところにブイデルという小さな町がある。河に面したレストランで静かにお茶を飲んでみると、思いがけない君が代の楽の音にふと河口を見るとOSKの船が静かに入ってくる。レストランの前のポールにすするすと目の丸の旗と鯉のぼりが上げられ日本の船よごそいらいつしやいしましたと歓迎の辞がスピーカを通して響き、懐かしい日本船から答礼の汽笛が何回も静かな夕暮のエルベ河に溶け入るように尾を引く、美しい親善風景に心が暖まる想いがしました。

ドイツ人はよく喰う。アイスバインという料理は豚の足の塩ゆでで、大人の握り拳四分位の大きさに、抜き残した剛毛があつちこつちと残っている、脂濃い奴もビールをがぶがぶ飲みながらもりもり喰うのは壮観です。タートルは生牛肉に生卵・玉ネギ・塩・胡椒を練り混ぜて黒パンにつけて食べる。思うだに怖るべき食物と馬鈴薯を大皿に山盛り馬程喰べこれが為に花恥かしきメッチェンも40才頃から豚の如く象の如く肥満してしまふ。

ドイツ人は親日的である。レストランで日本人の客と見ればテーブルに目の丸を立て、見も知らぬ人が隣の卓から日独親善のためと乾盃してくる。ハンブルグの空港税関も特に親切で米国人にきつくと日本人にはフリーパスでどちらが戦争に勝つたのか解らなくなる。在留紳士が浅草と呼ぶレーパーバンで異国情緒を味つてハンブルグはよい所という見方もあるが、親しく街の生活に溶けこんでみてこそ、この町のよさが解つてくるのではないかと思う。

### ドイツの田舎

辺境の繊維会社を訪れるため車を借りて約二千軒ドイツ国内を南に北に走りまわり、ついでにラインを越してスイスまで長途のドライブで、神武以来でなくしてキリスト以来初めての日本人の訪れという田舎の町々を尋ねてみました。ヒットラー最大の功績のアウトバーンは実に素晴らしい、坦々たる高速道路を時速120軒で飛ばすとスピードの感覚が全然異つてくる。飛ぶ虫も逃げられないのか、300軒も走るとフロントガラスに虫がへばりついて曇つてくる。スタンドで給油しながらふいて貰う。ここで貰つた地図を頼りに、全然未知の土地を訪れても絶対に道に迷わない程交通標識は完備し、言葉のハンデキャップも苦にならず目的地へ到達する。道路番号の桁の多くなる程田舎道になるが、村道位のもので東流西流にあれば何時も気がかかる。

古い城壁にかこまれたオスナブルグの町から更に西へとオランダ国境に近いライネの町は古くからの繊維の中心地で、先祖何代から引継がれる各自の仕事の忠実に実施しているところにドイツ勲績の特徴があり、また人的構成の新陳代謝の困難さが伺われる。工場は赤レンガの立体的なものが多く、利益を機械の改善に注いでいるが設備の増設は絶対に避けているところに日本と違つたドイツ的な経営感覚がみられる。

車のまわりを集つてくるドイツの子供達は明るく無邪気で、もうこの世代には敗戦の暗さが全然見られない。学校で習つたのたどしい英語を使いたがつて身ぶり手ぶりのゼスチャーで話しかけてくるのも可愛いものです。

車が南ドイツに近づくにつれてパバリヤ風のニッカーをばいたお百姓さんが盛んに手をふつてくれる。ラジエーターの水を貰いに立ち寄つたら、新鮮なミルクまで飲ましてくれる親切さには国境を超越した暖かみを感じる。南へ入つてくると単調だった風景も丘から山へと変化に富み、車窓からの緑の起伏に長途のドライブの疲れを慰やす。東独へあと三軒のホフの町に立寄つて町の人々と共進園について話合つた事も忘れられない。この町でも今まで隣町志の附合が完全にイデオロギーを異にした国に分かれて、自由な往来もできず、戦前はドイツの交通の中心も今や西独の忘れられそうな片隅に押し込められ、一日も早くあのパリケードの取れる姿を願つてゐるとはこの町の人のみの願いでなく、全ドイツ人の唯一つの希望でしょう。

### あとがき

夢の様な長生きの国、北欧で初めてみる白夜の神秘感、4ヶ国占領を解除され新生の活動を始めたオーストリ、チューリップに埋る風車の国オランダの町々を走り廻る、自販車の絶間ない流れにとまどつたり、スイス、オーストリア国境の山の中にあるリヒテンシュタインというポリスマン4人に守られたおとぎ話の様な独立国の、のどかきにユートピアとはかくならんと感じたり、英国の頑固、保守的な紳士道の裏にテリボーイと呼ぶ太陽族が幅をきかせているのは戦争に勝つた国とは思えなかつたり、ファッションの都パリでは、1ヤール3000円という毛より高い綿プリント生地は驚きつつ、フランスを南に下ると、水の代りに飲むブドウ酒の安いことに只の水を200円も出して飲んでる勿体なさに無常感を感じるのも、ノーアルコールの身となれば如何ともしがたく、ニスから北イタリアに入つて初めて安いオレンヂジュースにめぐり逢いほつとする。社路60時間近くかかつた南廻りに比べ、帰途北極廻りに乗ると28時間余りの早きに今迄遠い国だつたヨーロッパも、手が届く様な近所になり、何千年もの伝統に培われた欧州文化の流れはこれから直接、間接に我々の仕事上にも密接に結びつき、これらのエレガントな要求を生かした、日本繊維品の今後の海外への飛躍が待たれます。(化1大和紡)

## 地球1周

佐藤雅久 (化3)

昨年10月31日羽田を出発して140日間で地球を西廻りの1周を試みた。最近の映画で世界1周80日間というのを見たがあれほどのスリルもなく、外遊という文字通り外国で遊んで来た。しかも窮屈なおもいをして言葉も通せず、風俗習慣の異なる国々で飛行機・汽車・自動車に乗ったり、降りたりホテルでトランクの蓋を開けたり閉めたりの連続であつた。

訪問した国はタイ；イタリア；スイス；西独；ベルギー；オランダ；フランス；イギリス；北米；カナダ；ブラジル；ウルガイ；アルゼンチン；チリ；オーストラリア；ニュージーランドの16ヶ国で40日間はオーストラリアにいたから100日間で39都市をぶらついたわけだ。

目的としては、羊毛副産原料集散地、紡織機械メーカー、紡織メーカー訪問で日本で商社の人から聞いたことを自分の眼で確かめ、また批判する材料を得たことは有意義であつたと思つている。

原料、機械屋は取引しようと思うからサービスよく誇大に宣伝し、それぞれの内容も詳しく説明してくれるが、紡織メーカーは東洋の競争国と警戒気味で見学を敬遠されたが、各国駐在の日本商社のお骨折りで見学の目的をある程度達せられたことは幸いだった。ことに毛紡ではイタリア北部のブラトー、ピエラ近辺の中小企業体の発達していることは大なる参考になつた。日本でいつたら箱根のような環境の中に2、3セットの紡毛糸メーカー、 $\frac{1}{2}$ 、 $\frac{1}{4}$ セットのコーマースピナーが点在し、それぞれイタリア製の最新式の機械で能率よく経営されている。ヨーロッパは地震が少いせいかなすべてレンガ建て工場外観は農家の納屋のようだが、中は蛍光灯照明、温湿度調整の附属設備も完備し、紡毛機はマンモスカードと称する働巾2.20メートルの4.5山カードで投入原料もボロをラッグマシンのみ掛けた程度の5センチ角ぐらいの断片の多くあるものが使用されているが、篠までにはこれらもよく解舒され糸屑など残らぬ立派な糸が紡がれている。梳毛も5、6時間分の原料在庫で電話で原料屋に連絡すればすぐ持つてくるといったやり方で、もちろん加工賃仕事のところもあるだろうが立派な設備をもつて経営が成立つ経済環境が羨しく感ぜられた。製品はアフリカ、中近東、ヨーロッパ各国に輸出され企業採算も充分らしい。なぜか判らない。紡織メーカーに関してだけでなく、村落にある各商店も銀座通りにある店のように立派なものだが、これも夕方5、6時頃になると閉店、よくやつていける。なぜか判らない。この点は訪問した各国とも同じで、これについて判然と説明のできる人はいなかった。労働時間も36時間、40時間、48時間とあるが、これで経営の成立つその国の経済基盤は全然僕自身を納得せしめる材料はなに1つ得られなかった。

西独の戦後の目ざましい復興発展の原因は何故か、日本に紹介されている表面的なものでなく、歴史と国民性・自然環境をもつと深く研究する必要があると思つた。もちろん僕にも判らぬが、第1次、第2次大戦で日本以上に国土を破壊され、狭められたにも拘らず、現在では世界の優位にあり第3次大戦でも起つてまた破壊されたら今度は世界一になると自

信をもつて誇れる不屈のドイツ魂を日本もまねたいものだ。

近代文明の大なる特長は科学の進歩にあるといふ、科学の進歩は研究の成果ともいえる。日本のように製品→部品→材料といった逆コースで基礎研究から製品化の面が足らぬので外人から日本人は物真似が上手だと批判を受け、真似でもよいかから輸出に向けられればコスト高となり競争に勝てず、出血輸出でダンピングするとまた批難される。日本国内の生存競争をそのまま全世界に向つて沢山の窓口を通じて競争するから外商にも信用されず値段を叩かれ、ますます苦しい輸出を続けている。独禁法には触れるかもしれぬが、協同組織で業者間の暗黙の協定を守つて輸出の歩調を保つ経済基盤を早くもちたいものだ。

日本の悪い面のみ書いたが鉄道は世界一を誇つてよいだろう。外国は1世紀前の機関車・客車をそのまま使用しているのだから発明は早い、あとの改善整備がおくれているから、お粗末なものだつた。また日本は国土の狭い割に景色の変化に富んでいるのであるから観光設備が完全なら観光客からの外貨獲得も相当見込めることだろう。人情の機微もあつちと思ふ外人は他人のことに干渉しないから自分のことにも余計なことをいわせない。親子の情も子供が出世して親を施療病院に入れて平気でいられるといつた習慣、日本人の尺度で外人を批判することはいけぬかもしれぬが、どうも割り切れぬことが多い。

先輩、後輩の皆さんの中で海外に行けるチャンスがあつたらどどん若い中に外国を見ておく必要があると思う。ただし僕のように短期間に多くの国を廻ることは賛成しない。言葉や地理がいくらか判るようになると別の土地に移るのでいつもまごついた。日本のように左側通行の国もあれば右側通行の国もある。暑いところ、寒いところ、これだけでも神経が疲れる。それから英語だけは是非勉強することを奨める。書く英語より喋る英語だ。難しい文法はあとまわして、中等学校初年級程度の文法を充分頭に入れて、あとは単語を数多く覚えることだ。難しい文法は英人や米人でも普通は使わず知らない人もいるのだから、極端にいえば単語を並べ、あとは手まねでも相手に通じる。外人にジェスチャーの多いのは言葉だけでは通じ切れぬので身ぶりで補足しているものと感じた。

各国の対日感情の問題も外遊の先輩が誇張しているだけで現在ではどの国でもお客として迎えてくれるし、一般人は日本人など問題にしないといつた態度だ。英人は冷いというが、これは日本人にだけでなく、同国人同志でもそうなのだから仕方がない。

千曲会報に投稿するには文学的才能もないので外遊体験を

充分表現できませんでしたが、佐藤は外国で遊んできたということだけ御報告しておきます。

(筆者は丸新フェルト副社長)

## 藤井富美男氏海外視察

藤井富美男氏(紡8回日本紡)は海外の繊維機械調査のため、4月20日羽田を出発、欧州各国および米国の繊維事情をつぶさに調査され、7月末帰国された。今後同社の重鎮として活躍を期待されている。

## 農博勝又君のビルマ赴任について

唐 沢 正 平 (蚕2)

農博勝又藤夫君はビルママンダレー大学教授に就任が決定し、9月上旬渡緬就任されることになった。同君の榮譽のみでなく、ビルマ日本両国蚕糸業界のために、また私は同窓千曲会の1員として慶賀にたえぬものである。

ビルマは1953年以来独立民主主義共和国政府の国策として蚕糸業の開拓を計画し、養蚕は Kayah state, Shan State, May Myo, Kachin State, Bhamo Pouk Kawng, Sand Way, Toung dow inggi の8地区に約250町歩の桑園を設け、さらに年々これを拡張せんとしつつある。また Maymyo に片倉多糸機100台の製糸工場と蚕糸試験場を設け、さらにマンダレー大学農学部にも養蚕科を設置するなど着々ビルマ蚕糸業の開拓を策している。

これらの開拓は当初から日本の蚕糸技術者を中心として設計推進されたもので、現在日本の蚕糸技術者が14,5名駐在して養蚕に製糸に学生教育に当っている。しかしその成績はビルマ政府が当初予期したものとは余りに距りがあるので当局者も少しもあまじい味で、今日決して満足のものではない。ことに1昨年日本ビルマ間に賠償協定成立後はこれらビルマ駐在日本の蚕糸技術者は全部賠償債務によつて雇傭されることとなった。

私は昨年4月アジア協会に蚕糸業委員会が設置され、その幹事長としてアジア各国の蚕糸業状況を調査した結果、まず第1に感じたことはアジア各国が蚕糸業の開拓を熱心に考慮研究していること、万一日本がその開拓を指導せぬと中共・ソ連の蚕糸業指導者によつて経済技術の協力、親善友好の名目をもつて蚕糸業が開拓されんとする機運が濃厚なことであった。それ故ビルマ蚕糸業も日本の技術者によつて指導され

るからには、中共・ソ連の指導に劣らず充分相手国に満足して貰うものでなくてはならぬと考えた。その結果、ビルマについても、従来のごとく日本技術者が何らの連繋もなく、銘々バラバラでたゞその時々思いつきや行きあたりバツタリの指導ではいけない。ビルマに人格識見高く、経験に富んだ有力な技術者を駐在せしめて両国蚕糸業関係者の間やビルマ駐在日本の技術者間の連絡提携およびこれら駐在技術者とビルマ政府当局者間との連絡に当らせるために中堅となる技術者の派遣の必要を痛感した。昨年6月蚕糸業委員会の決議を経て、アジア協会々長藤山愛一郎氏の名をもつて外務・農林・通産・経済企画庁の各大臣およびビルマ政府および在東京ビルマ賠償使館に對し“ビルマ賠償に関し蚕糸業関係者の協力改善に関する意見書”を提出協議した。幸い関係各方面が喜んでこれを採択されたので、懸案となつてきた農博中田太郎君を8月松本に訪問し、その赴任を促進し、11月中田君が赴任されたので、ビルマ政府関係者も駐在日本の技術者も大いに喜び、今後の活躍を期待されたが、不幸、本年3月惜しくも客死されたのは真に残念でお気の毒だつた。その後ビルマ政府は後任を慎重に入選中であつたが、4ヶ月を経て8月初め勝又君の就任が決定した訳だ。従つて氏の任務はマンダレー大学教授のみならずビルマ蚕糸業の開拓指導についても大いにその活躍が期待されるわけである。

現在ビルマから本年4月以来 Maymyo 蚕業試験場長 Bo Ni氏が国連FAO研修生として来日され、先頃から日本各地を視察研修中で10月帰国される予定であるが、帰国後この生真面目で熱心な紳士の場長と勝又博士と提携してビルマ蚕糸業の開拓を推進すれば大いにその成果が期待できると思う。U. Bo. Ni は日本から模範養蚕家を20戸内外導入したい希望をもっているようだから、これによつて今日まで桑が年中伸長するから年間10数回も掃立ててほとんど繭を見ない。飼育の回数が多くそのため開拓は失敗だと非難されたことも適時の掃立回数の調節によつて繭のとれる養蚕となり、ビルマ蚕糸業の開拓も軌道にのれば、これらの非難も解消されることと思う。

勝又君は近く赴任されるが、気候・風土・人情の違う異国への赴任で真にご苦勞であるが折角自愛の上、ご健康で活躍の程を祈るものである。

(筆者、Asia 協会蚕糸業委員会幹事長)

連絡先 Fujio Katsumata  
c/o Faculty of Agriculture  
Mandalay University  
Mandalay, Burma

### 中国蚕糸業視察団出発

(宮城蚕糸課長、佐藤勇二氏も参加)

長野県ではかねて日本中国間の蚕糸業技術交流を計画していたが、今回蚕糸業視察団を結成し、一行は去る9月8日長野を、10日羽田を、中国へ飛行された。視察期間は凡そ1ヶ月位とのことである。

日本の蚕糸業の為、又日中親善のためにも、充分御活躍の上多くの成果を期待してやまない。尚一行のメンバーは、団長県議中村兼治郎、副団長地引長野蚕試場場長その他数氏であるが、千曲会員として長野県蚕糸課長宮城博氏(蚕18)、藤本蚕種株式会社佐藤勇二氏(蚕33後)が参加され勇躍出発された。(山口)

### 特別活動資金の募集について

御承知の如く、同資金は就職斡旋事業を推進し大いに会員の福祉増進をはかるためのものでありまして、全国各支部から選出された就職斡旋委員の協力を得て、本資金を以て本格的な活動を開始し、既に多数の会員の斡旋に成功し、着々成果を挙げております。しかるに当初予定額に比べて未だ3割程度の応募金額に過ぎません。未だ御届出なき方は事情御察下さしまして至急に御届出の程お願いいたします。

## 南米へ養蚕農村と蚕糸研究所とを 設置することの構想 (その5)

碓 氷 茂 (紡3)

### 10. 蚕糸研究所と就職のあつせん

母校創設50周年記念事業の事業目標をどこへおくかは実に重要な問題でありまして、この目標が適正を欠くと、せつかつきの記念事業も意義をなさないこととなります。

私はその目標の重点を、卒業生すなわち千曲会員の就職におきたいと思ひます。

母校が創設された当時の明治の末年から大正の初期へかけては、日本の蚕糸業が洋々たる発展期にありました。日の出のような、明るい前途を持つていた時代でありました。ですから、この時代の母校の卒業生の就職には、ほとんど困難が見られなかつたのです。

ところが現代はどうか。当時の日本の蚕糸史とは打つて違つて落調期にありまして、明治末葉から大正の初期へかけてのような、明るさと希望とが消え去つてしまつてしまつてはご承知の通りです。

もつともこれは母校に関してだけの問題ではなく、他の大学においても同じ傾向が見られないわけではありませんがとくに顕著なものが蚕糸業に関する大学だと思ひます。それだけにわが千曲会においては、特別これが重要問題であるわけですから。

ただいま千曲会当局が全力をあげて就職問題の解決に努力していられることは千曲会員のひとしく謙承済みのことであります。

しかし千曲会当局の努力にもかかわらず、就職戦線は思うような展開を見せておりません。日本の蚕糸業それ自体が最盛期に比べてはるかに落調期にある以上やむを得ないことであります。

わたくしは母校創立50周年記念事業として、南米へ養蚕農村を建設することを提唱しています。その目的の重点はいうまでもなく、就職問題の解決を計ろうとするにあります。

養蚕農村への入植者には千曲会員が是非参加していただきたいのです。1戸当り25町歩から30町歩の土地の割当てを受けののですから、養蚕を中心とした農業経営をすれば、それだけで既に将来立派な農家としての生活を維持することが出来ます。日本内地の農家の耕作反別が、平均8反歩そこそこでありまして、南米ではその20倍も30倍もの土地を所有するのでありますから、立派な農家として立ち行くことが出来ます。しかも土地は、日本のそれに比較すればすこぶる優秀です。無肥料で20年以上も作物の栽培が可能な土地が沢山あるくらいですから、農業経営の収支が、日本のそれと比較していかに有利であるかは、これだけでも明らかです。ですからこの計画に参加して、農業を自営することだけで、すでに相当数の千曲会員の就職が可能となります。

なお蚕糸研究所への勤務者も相当数必要です。とくに蚕種

製造をする場合には、その中心者に千曲会員が当ります。さらに製糸工場建設の場合には、この方面へも千曲会員の参加を求めなければなりません。第2期計画では機織も行方方針ですが、この場合にもこの方面のスタッフを千曲会員から出さなければなりません。

さらに、最も重要なことは、この蚕糸研究所へ就職斡旋部を設置することです。この就職斡旋部は、いよいよ南米千曲会支部ともいわれるべきもので、この斡旋部の活躍によつて千曲会員の就職の斡旋を徹底的に行ひます。

南米は洋々たる未来の国です。夢見ることの可能な、これからの国です。幼年期から青年期の国です。日本なら産業面では、明治初期に当る国といつてもいいでしょう。農業はもちろん、商業も工業も、あるいは鉱業も、あらゆる産業の勃興期にある国です。人口はぐんぐん膨張しています。産業の勃興に伴う人口の驚くべき膨張期にある国は、仕事がいくらでもあります。前後左右、どちらへ向いても仕事だらけです。しかもその仕事は、あらゆる方面に亘つています。どんな仕事でも、真剣にその仕事に取組(とつくり)さえすれば、成功しないはずはありません。そして仕事の多いのに人手が足りないという国です。面白いではありませんか。とくに若い人達にはもつて来いの国であります。南米で食えないとか、生活が困難だとかいう人は、ごく特殊の事情にある人か、でなければ、意けもかであります。

ただいまサンパウロ市に、日本人のバガボン(浮浪人)が多くて困ると、サンパウロ市の日系人が心配しています。そのバガボンはいうまでもなく、仕事がきらいな連中です。皆若い、終戦後日本から渡つて行つた連中です。この連中は仕事がきらいなのです。ですから食えないのは当然です。

このように南米での就職は、あらゆる部面に亘つていのですから、それぞれ自分に好適した方面へ就職すればいいのです。南米へ養蚕農村を作るのだから、その養蚕農村へ固定させて了うというわけではありません。それぞれの持つ特技を思う存分伸して下さればいいのです。農・工・商・鉱等、いずれの方面でもよいのです。実に南米では、如何なる部門でも洋々たる前途を持つていのですから本當に愉快です。

蚕糸研究所内にある就職斡旋部は、徹底的に就職のあつせんをいたします。つまり就職の総本部が蚕糸研究所でもあるわけですから。

そこで問題は、それなら千曲会は、南米へ単独に支部でも設けて、就職あつせんのみをしたらどうか、何も養蚕農村の建設などという厄介なことをしなくてもいいではないか、養蚕農村の建設などということは、その道の専門の機関に委せたらいいではないか、という問題ですが、この点については次回に述べることにいたします。

## 蚕糸・繊維化学の最近の研究

## 桑白紋羽病の防除法——その現状と今後の問題——

白紋羽病は桑、果樹類、茶、ラミーなど極めて広範の多年生作物を侵し、年々軽視できない損害を与えているのは悉知のことである。本病はこのように多犯性であるのに加えて被害部が地下であり、かつ病原菌が土中に永存するため、その防除は極めて困難とされている。

ここ数年来、本病防除に関する実際的および基礎的研究の機運が高まり、防除法確立というにはまだほど遠いが、かなりの新知見が加えられた。ここにその大要を紹介し、今後の問題点等もあげてみたいと思う。

**苗木の消毒** 本病に侵されているおそれのある桑苗の消毒として、従来は石灰乳、硫酸銅溶液、昇汞水などに浸漬することがすすめられていた。しかしこれらの方法は根の表面の菌糸を殺すだけで、組織中に深く入った菌糸に対しては無効である。内部の菌糸まで殺すには温湯消毒——45°Cの湯の中に60分または47°Cに30分漬ける。据風呂などを利用する——が最もよい。青木博士によれば紫紋羽病は45°Cでは10分で死滅するというから上法は両紋羽病菌に対して有効である。なおこの消毒で桑苗は全く無害である。

**桑園における病気の拡がり方** 上田市附近で数年間調査した結果によれば、根刈りした桑園における本病の進展は、大体1年に周囲へ1株通りずつ枯込んでゆくのが典型である。この速さは桑の品種、土質等によつてあまり左右されない。したがって1年当りの被害株数は年を追つてふえてゆく。早期発見、早期処置が大切なゆえである。また同時に行つた調査によれば被害株の隣の株は地上部は健全に見えても根の一部にすでに被害のあるものが大部分であり、さらにその隣の2列目の株にも菌糸のみられることがしばしばあつた。このことは遮断溝を掘る位置を決めるのに重要である。

**遮断溝** 病株を発見したら、それ以上拡がるのを防ぐためにまず遮断溝を掘りめぐらす。その位置は上の理由によつて外観健全な株を2株通り含めた外側にする。溝は巾1~1.5尺、深さ3尺とし、土は病株の側に上げる。時がたつと壁の土が風化してぐれおち溝が埋つてくるから、時々あげねばならない。遮断溝を設けることによつて病気の伝染を阻止することができる。しかしその作用を一層完全にするため、いかなる手段をとればよいかは今後の問題であろう。

**跡地の土壌消毒** 本病発生跡地の消毒には従来クロールピクリン(1ポンド/3坪)または二硫化炭素(1~2ポンド/1坪)による土壌燻蒸が推奨されてきた。しかし島地で実際に近い方法で検討したところ1ポンド/3坪のクロールピクリンではあまり効果のないことがわかつた。土の温度の最も高い7~8月にこの倍量、2ポンド/3坪(薬剤費は坪当たり約170円)つかうことにより裸出状態にある菌糸のみをはじめで完全に殺すことができる。しかし桑の根の中に侵入した菌糸は、直径2.5mm位の細い根のものでも深さ50cmより下にあるものは相当数生き残る。根が太くなれば生存率もつと大になる。また粘土の多いかたくしまつた土塊中にもクロールピクリンのガスは浸透しにくい。従つてクロールピクリンで消毒するには、あらかじめ天地返しをして、桑の根は細大もろさずとりのけ、粘土の多い土地では大きい土塊をくだ

いておく必要がある。クロールピクリン注入後は従来、地表に撒水するかぬれむしりて覆うかしたが、農業用ビニールで被覆すると一層効果を高めることができる(渡辺氏)。なお春、秋等地温が低い時は消毒効果がかなり低下するから、必ず夏行うようにする。

二硫化炭素でクロールピクリンと同程度の効果をあげるには薬剤費が2倍以上になり、その他2・3の欠点もあるからあまり有望でない。その他農業雑誌や新聞の産業欄等で時折見かける石灰燻蒸、生石灰等の使用では菌の絶滅はあまり期待できない。

上記のように現在最も有望なクロールピクリン消毒でも多大の労力と費用がかかり、被害面積が小さい場合にすすめられる程度である。今後これに代る強力で効力持続期間の長いかつ安価な土壌殺菌剤の出現が強く要請される。

**転作その他による菌の撲滅** 薬剤による土壌消毒が上のような現状ではこれを大面積の発生跡地に適用するのは極めて困難である。そこでこのような場合に考えられるのが何年間か抵抗性作物を栽培し菌の自然消滅を計るという手段である。また抵抗性作物だけでなく菌の永存に不適当な土壌環境をつくり出してゆく何らかの手段も同時に考えられねばならないであろう。これらの問題は本病防除に関する今後の研究の中心的課題の一つであろうがまだ緒についたばかりである。

**抵抗性作物** 上記に関連して抵抗性作物が問題になる。従来“禾本科作物は白紋羽病菌に対して免疫性であるから、本病発生地には数年間禾本科作物を栽培すればよい”といわれてきた。しかし4種の禾本科作物について試験した結果、強抵抗性であつたのはこむぎだけであり(たゞし若いこむぎの根は夏には多少の侵害をうける。老成根はほとんど浸されぬ)。おおむぎの根はこれより弱く、とうもろこし、ほうきもろこしの根は甚だ罹病性であつた。こむぎが幼弱な期間は白紋羽病菌の活動の不活潑な冬~早春であるから、これは白紋羽発生跡地の秋~春の作物として適当と思われる。りくと、あわ、きび、ひえ等については検討中であるが、夏作物についても本病防除に利用できる抵抗性作物を探し出さねばならない。

その他多くの1年生作物は、たとえ白紋羽病の出た島に栽培しても経済的被害はほとんどない。しかしこれは本病が慢性のためであつて、根の一部が浸され白紋羽病菌の増殖永存をゆるしている場合が多いから、その絶滅を期そうと思ふ場合には充分注意を要する。

**結言その他** 本病の防止策として現段階で大事なことは、抜根した病株の不意な取扱等による伝染に気をつけることはいふまでもないが、まず早期発見と遮断溝の設置によりそれ以上の蔓延を阻止することである。被害が小面積に止まれば労力と費用をかけてクロールピクリンで徹底的に消毒することも可能であろう。しかし被害面積が大きい場合には、経済的に引合いかつ確信のもてる防除法のきめ手はないというのが現状である。

そこですでに述べたようにクロールピクリンにまさる土壌殺菌剤の出現と土中における菌の自然消滅を促進する手段方法の確立が強く要請されるわけである。特に前者は他の土壌病害にも共通する農業界の重要課題であろう。(7面左下へ)



## 学 術 体 制 の 新 方 向 林 貞 三

政府は中央教育審議会を設け、第10特別委員会において大学における科学技術教育について審議していることはご承知の通りである。日本学術会議においてもこれに呼応して学術体制委員会を設け、国、地方、官界民間を問わず、学術研究体制につき審議することが付托され、特に研究者養成の問題を重視される関係から、大学院および大学における研究体制従つて大学の再編成にもおよび現実論のみでなく理想論を打出そうとしている。委員は16名、委員長は京大の桑原会員、幹事東大の玉虫会員と愛知大学長小岩井会員。第6部からの委員として京大農学部部長井上会員と私とが選出された。これまで3回委員会が開かれたが今年度は中央教育審議会の審議の進行状況から見て秋季総会まで意見を観めることになった。

まず大学問題につき各委員の考えが自由開示された。その主なるものを拾つてみれば次のごとくである。

- 1 新設新制大学の現状は第3期会員浦生氏より縷々述べられて諒解しているが、旧制大学も大学院設置に対し予算的裏付けがなかつたので極めて不完全である。一般教育に2ヶ年、専門教育に2ヶ年では責任が持てない。もともと旧制大学は在学年において1ヶ年短縮されたのだから、その埋没した1年を延長し5年制とし修士コースを無くせ。
- 2 旧制大学を5年とする方法として小学校を5年制にしてはどうか。或は高校2年より大学へ入学を認めてもよい。
- 3 旧制大学院大学とし地方大学の卒業者を入学させるようにすべきである。
- 4 教育学部を府県の義務教育教員の計画養成機関として処理してはどうか。
- 5 中学高校の教育のために大学卒業後1ヶ年教育に必要な教育をすべきである。(米國式)
- 6 文理学部は一般教育2ヶ年を分担すれば学部としての余地はない。
- 7 大学院には就職できなかつた者が入る傾向が多い。奨学金を充分支給して次代を負う優秀な研究者を養成すべきだ
- 8 例えば四国に農学部が3つある。これを東大農学部並にせよといつても無理だろう。分離統合を行い道州制とミラミ合わせて総合大学としても良いし単科大学にしても良い。
- 9 大学には研究を主とする大学、職業大学、教員養成大学、芸術大学の四種に分けられる。当然大学に差別あつて良い。大学施設法には大学の修業年限は4年以上となつており医学部は6年制である。5年制があつて差支えない。

以上のような考え方を整理し、研究者養成、教員養成問題を討議し大学の再編成に及んでいる。いまだ明確な結論は得られないが次のような点が有力になつて来た。

- 1 大学は大学院を有する大学を5年制に他を4年制とする
- 2 教育学部、文理学部、学芸学部は教育の目的が明確でない。これをそれぞれ目的に叶つた学部に再編成する。
- 3 地方大学を充実するため分離統合を行い地方の特色を充分にいかすこと。
- 1は医学部を除いての話である。問題は地方大学の格下げとなり地方から大学院に入り難くなることである。
- 2それらの学部には一般教育を受持つていて一般教育の問題を別個に検討したうでなければならぬ。
- 3は分離統合することにより大学院を置き得るか?種々特殊事情もあつていべくして実行は容易でないように思う。委員会の模様も全員一致というわけにいかない、大体のところ総会の議に付せられることにならう。

(米3 日本学術会議会員)

## 桑の苦土欠乏症と土壤及び施肥との関係

木田・井出、農及園Vol 32, No4, 1957.

筆者等は12種類の土壤を集めて桑を栽培し実験していたところ、その中の4種類の土壤(洪積層-腐植に富む埴土及び礫土、安山岩-腐植に富む埴土、白色火山灰土-埴土)\*

(6面より続く)

りんごその他の大木の果樹類の白紋羽病では、被害根の露出とウズプルン800—1000倍液の灌漑(5升~1石/1本)により本病の治療(あるいは延命)にある程度の効果をあげている。しかし根系の小さい根刈または中刈仕立の桑の場合にこの方法が効を奏するかどうかは疑問である。

以上のほか、土壤中にある本菌の検出法の問題がある。これは桑苗を新植または再植するに先だつて、菌の有無をたしかめるために必要なことである。それには他の土壤病書で行われている2・3の方法があるが、白紋羽病の場合いずれが適当か現在検討中である。なおその他、白紋羽病菌に拮抗作用をもつ *Trichoderma* 菌についても2・3の試験が行われている(高木・渡辺・山本・山田氏等)。しかしこれを實際の防除に応用した例はまだないようである。

(植物病理研 桜井 善雄)

\*に植付けた桑の葉に顕著な chlorosis 症状がみとめられた。これは桑の苦土欠乏病であろうと推定し、その現われた土壤の性質及び施肥した肥料(無機肥区、蚕蛹粕区、堆肥区)等について調査考察して桑の chlorosis 症状は苦土欠乏に由来するものであろうとしている。調査結果は次のようである。

まず桑における苦土欠乏症の原因は土壤の置換性  $MgO$  の少ない場合と、 $MgO/K_2O$  の比で置換性  $K_2O$  が多い場合とが知られており、酸度も一般に強いことが多いといわれている。

そこで筆者らのしらべた土壤を chlorosis 症状を発現したものと発現しないものとに分けて比較すると、chlorosis 症状発現土壤は酸度強く、置換性  $CaO$  と  $MgO$  が少く、 $K_2O$  が多い。したがつてこれらの土壤は苦土欠乏を来し易い条件にあることが容易に推定された。更に chlorosis 発現土壤は置換性  $MgO$  も欠乏状態にあり、又置換性  $K_2O$  が異常に多いため  $MgO/K_2O$  を著しく低下せしめている。

施肥条件と chlorosis 症状発現との間には明らかな差異を認めたと、その土壤成分を比較すると、chlorosis 症状の発現程度が最も著しいのは無機肥区であつた。これは酸度最も高く置換性  $CaO$  と  $MgO$  も少く  $K_2O$  は最も多く、 $MgO/K_2O$  の値も小さい。蚕蛹粕区と堆肥区との間では概して堆肥区が chlorosis 症発現が少いようであるが、各成分に大差は認められない。(柳 沢)

## 尾沢敏男氏(糸22回)工学博士の学位を受く

鐘紡化学研究所第2課長・鐘紡名譽社員参事・尾沢敏男氏はビニロンに関して各方面より研究され、ビニロンの湿式紡糸湿熱処理およびホルマル化なる工程を経て、工業的にビニロン繊維を製造する際の最適条件を見出し、その理論的解析を行い、これを「合成繊維ビニロンに関する研究」と題し大阪大学工学部に学位請求論文を提出し、昭和32年7月28日附をもつてめでたく工学博士の学位を授与された。以下氏の論文内容を紹介する。

第1編においては、原料ポリビニルアルコール(以後PVAと略記する)の性質を研究の対象とし、原料PVAの残存酢酸基がこれよりつくつたPVA繊維の熱処理による結晶化を著しく阻害することを見出し、溶液状二次酸化によりこの障害を除き得ることを実験し、NaOHによつて二次酸化を実施する場合の条件を検討し、またNH<sub>3</sub>およびNa<sub>2</sub>CO<sub>3</sub>による二次酸化についても研究し、工業的に実施する二次酸化の好適条件を見出した。また原料PVAの平均重合度の影響について研究し、工業的操作の難易、耐熱水性、強伸度、製品の均一性などの点から、衣料繊維用としては平均重合度は1100-1400が適当であることを知った。なお酸化PVAを原料としてビニロン繊維の製造研究を行い、酸化PVAはアルカリ酸化PVAより同一酸化度であつてもやや熱処理が効きにくく、この理由として、酸化PVAにはアセタール部分が少量存在することを考えた。酸化PVAも二次酸化を行うことより、支障なく十分な強伸度および耐熱水性を有するビニロン繊維とすることができる。

第2編においては、Na<sub>2</sub>CO<sub>3</sub>およびNaH<sub>2</sub>PO<sub>4</sub>を凝固浴とする紡糸実験を行い、これらは硫酸に劣らぬ凝固力をもつことを知つたが、湿熱処理と関連して硫酸が工業的に最適であることを認め、硫酸を凝固浴とする紡糸方法を詳細に検討した。紡糸方法として無緊張紡糸、湿熱後延伸法を強伸度共にすぐれたPVA繊維が得られる好ましい方法とし、紡糸液濃度、

凝固浴濃度、紡出織度、紡糸速度などを变化して凝固速度に遅速を与え、これを後延伸した場合の強度のあらわれ方をしらべ、紡糸時の凝固のよいものほど、また紡糸速度の大なるものほど、無緊張紡糸であつても、紡糸時に分子の屈曲が伸されることを知つた。また普通紡糸法によつてつくられた内外層の組織に粗密差のあるPVA繊維を後処理的に均一透明化する方法の研究を行い(特許第227,531号)、この後処理透明化に関連して、高温低濃度の凝固浴を使用して繊維断面を円形とする紡糸方面の研究を行った。特許第234,075号。



第3編においては、湿熱延伸法を研究の対象とし、まず常圧下の沸騰飽和硫酸浴を延伸浴として、延伸と応力の関係について実験し、工業的延伸装置および熱処理装置の設計に寄与した。また延伸倍率が同一であれば、延伸条件を变化しても強度と水中収縮率が変化しないことから、また水中および膨潤不可逆延伸部分の測定から普通行われているような湿熱延伸においては延伸による分子のすべりはないと推定した。

第4編においては、湿熱処理を研究の対象とした。ビニロンは紡糸、延伸したPVA繊維を熱処理し、結晶部分を十分に生成せしめ、これをホルマル化して非結晶部分を疎水化し、耐熱水性を与えたものであつて、熱処理はビニロン製造において最も重要な工程であるので、本研究の主体をPVA繊維の湿熱処理におき、詳細に条件を検討し、工業的最適条件を見出すと同時に、湿熱処理の機構をもあきらかにした。すなわち熱処理硫酸浴の濃度、温度、熱処理時間、冷却速度、熱処理時に繊維に加わる圧力、平均重合度、残存酢酸基、延伸率などの熱処理効果におよぼす影響をしらべ、PVA繊維の湿熱処理は、好適温度と好適膨潤度をPVA繊維に与え、PVA分子のマイクロブラウン運動を可能ならしめ、PVA分子をメタステーブルな状態から熱力学的に安定な結晶配位に再配置せしめ、結晶領域を増大せしめるのであることをたしかめた。別に延伸したPVA繊維に第1段熱処理を施し、続いて適当の収縮を与え、再び第2段熱処理を施すことにより、同一延伸率、同一熱処理条件においても著しく熱処理効果を高め得ることを知つた(特許第230,256号)。また熱処理によるPVA繊維の水および染料に対するaccessibilityの变化から結晶化の様子を推定した。

第5編においては、ホルマル化の研究を行い、工業的に最も適当したホルマル化浴の組成を見出し、また工業的にホルマル化を実施する場合に生ずる種々の問題すなわち蟻酸の生成、ホルムアルデヒドの蒸発などの問題を解決した。またホルムアルデヒド源としてウロトロピンを使用する工業上有利なホルマル化方法を確立した(特許第188,255号)。

第6編においては、広範囲にわたりビニロンの耐薬品性をしらべ、ビニロン濾布その他特殊利用の場合の参考試料を提供し、また特殊な呈色反応として沃度反応について実験し、その理論的考察を行った。

## 船田敏夫氏イタリーへ

船田敏夫(蚕30)は片倉蚕業研究所員であるが、伊太利の下記研究所へ招かれて去る7月出発された。こゝは片倉社顧問の小針喜三郎博士が先に同研究所の招きをうけ蚕の育種、遺伝等の研究を指導され日伊間をしばしば往復されているが現在小針氏が帰日されているので、船田氏がこの仕事を継承して、飼育や育種方面の研究に従事し、伊太利の蚕糸業の為又日伊親善の為にも大いに活躍しておられるわけである。船田氏の渡伊は二度目であるが努力が報いられ、特にイタリー語がペラペラというので、彼地でも、日本に帰つた時も大変貴重な人とされている。同氏の御自愛と御活躍を切に祈つてやまない。因に同氏の宛名は

Mr. Funada  
Centro Genetico ed Ecologico  
del Baco da Seta  
S. Giacomo  
Vittorio Veneto  
Treviso Italia.

(山 口)



### 横井講師理学博士に

東京教育大へ転任された西沢一俊教授後任の横井政時氏は昭和23年名古屋大学理学部卒業、同24年同学部山崎一雄研究室の助手、同31年本学部教養理科化学の講師に任ぜられた。現在はX線結晶化学の研究を始めておられる。

この度(7月26日附)名古屋大学より理学博士の学位を受けられたので以下氏の学位論文の概要を紹介する。

#### 「有機珪素化合物の分子構造」

近時各方面に應用の多くなつた珪素樹脂は無機珪酸塩と有機高分子化合物とに橋渡しをするものであつて、その両者の特性をあわせもつた興味深い樹脂である。その特性については分子の構造を明らかにすることによつて多くの示唆が与えられるものと考えられる。筆者は珪素樹脂の低分子化合物や、その合成の中間体について、気体電子廻折法により分子の幾何学的構造を系統的に研究して来たが、一応データをまとめて報告した次第である。

気体電子廻折法とは分子構造の研究法であつて、高真空中で試料気体の噴流を加速電圧約40KVの電子線にあつて、廻折像を写真乾板に撮影する。この乾板より廻折強度の廻折角分布がわかるが、一方分子の幾何学的模型を設定すれば、その模型について理論強度が計算され、実測強度と理論強度とを比較することによつて、その模型が事実であるかどうか判定することができる。こうして多数の模型について理論強度を実測と比較して、実測強度をもつともよく再現する模型をもつとも真実に近いものとするのである。

研究に選んだ化合物はすべて有機基を含むもので、以下に大別される。(i)珪素-ハロゲン結合をもつもの、(ii)珪素-酸素結合をもつもの、(iii)珪素-窒素、珪素-硫黄の結合をもつもの。以下各化合物について得られた知識の概要を述べる。

a) 原子間隔 珪素と炭素、窒素、酸素、硫黄、ハロゲンの結合距離は、別表に実測値を示したが、炭素化合物の場合と違つて一重結合半径の和よりも短くなつてゐる。またその短い度合は珪素と結合する元素の電気陰性度が大きい程大きい。珪素は炭素よりも電気的に陽性であり非金属元素との結合は部分イオン性をもつわけである。また珪素は炭素と違つて開放されたd軌道をもつており、そのd軌道に陰性元素の孤立電子対を収容する可能性があり、珪素と非金属元素との結合は部分二重結合性を帯びることが考えられる。実測原子間隔が結合半径の和より短いことは結合の部分イオン性、部分二重結合性のいずれか、

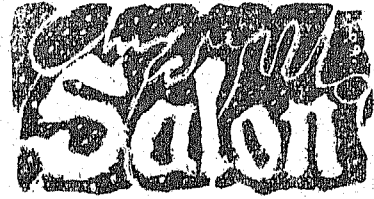
珪素	実測(A)	一重結合半径の和(A)
-炭素	1.88	1.94
-窒素	1.78	1.87
-酸素	1.63	1.83
-硫黄	2.15	2.21
塩素	2.01	2.16
臭素	2.17	2.31

あるいは両者の寄与によるものと説明される。

b) 原子価角 珪素の原子価角は大体正四面体角である。一方珪素-窒素-珪素、珪素-硫黄-珪素、珪素-酸素-珪素の角は分子によつて変化するが一般に正四面体角より大きく、特に酸素の場合は著しい。

c) メチルシロキサン<sup>○</sup>の構造 実際上有用な樹脂は珪素-酸素-珪素の連鎖を骨格とし、珪素に有機基を置換したオルガノポリシロキサンである。メチルポリシロキサンの低量体について実験の結果、酸素の原子価角が有機エーテルの場合の約110°に比しはなほ大きく約140°の値であることがわかつた。またこの角度は小さい環をつくるときは歪んで約125°にまでなる(Banerらによる)。酸素の原子価角が大きく、また歪み易いことは珪素-酸素結合の部分イオン性あるいは部分二重結合性から説明されるが、珪素の置換基間の距離を大きくし、珪素-酸素結合の周りの自由廻転を許し結局珪素樹脂の骨組みは分子内および分子間の力に対して極めて屈曲性にとんだ flexible なものと考えられるのである。

(四方記)



### 二人三脚信濃の旅 (I)

静岡県 戸倉 八峰

#### まえがき

山中湖と軽井沢——7月12日信州戸倉温泉に某招待会があつて出席した。この短紀行文を「二人三脚信濃の旅」と題するのはどうか。この疑点を解いての上この旅日記を書く前に「まえがき」と題して皆さんへ御伝えして置きたい事がある。悪口でなくて良い御土産話です。今日(8月2日)の日経新聞の随筆欄に目を通すと本多顯彰と云う人(法大教授・英文学)の短文が載つていた。奥さんは信州人との事。その文意は山中湖と北軽井沢との人情の比較論で戦前十年、山中湖畔の山荘で暮し、戦後十年北軽井沢の山荘で過した経過体験からして、物すごく山中湖人種を非難し、一方軽井沢の居心地を称賛している。即ち東海を嫌い信濃が御気に入りで、その説く内容がさもあらんと感心したのである。

山中湖も軽井沢も天然の自然美、雑木高原地帯で、名の通つている避暑地としては天下御免の勝地である。ほととぎすも鳴き、郭公(カッコウ)ホオジロも訪れ「自然と人生」そのものである。だが人種の差と云うか、原住民の人情の持ち味の差はどうする事も出来ない程露骨に常平生現れていて、山中湖周辺の避暑客に汚臭をバラ撒き憎悪の気分を起させ、一方軽井沢は反対に住みよい永住の地と考える程土地の人達の人情がこまやかで、親しみ深い気心地で毎日を通し得ると言うのである。この記事を読むと信濃気質は薄いものだと感ずる。かかる人情の温和で住みよい信濃に生れ・住み・人生を楽しめられる信州人の皆様は寔に幸福そのものであつて自惚過ぎてはいけませんが、少しは自惚れても仕様がなと思う。そう云えば小生の知己、知友は例外を抜かせば皆善人であり、交り易い人達ばかりである。そこで曾遊の地を思い出しては度び度び訪れたいのである。今回の二人三脚の旅も亦発意がここから出た訳でしょう。

ここで序でに古来からの伝説を一ツ。昔から「甲州人と牛の糞には氣を付けよ」と駿州人は云う。何故かと申せば甲州人種は理済の智に長けている事は江州人と共に日本の兩大関であるが、一面何となく警戒される人柄があつて東海人種に恐れられている。又牛の糞の方は駿州の奥地富士郡方面は昔から農家の牛飼いが多くて、自動車などから下りると枯葉の下に牛糞がかくられていて、踏むとヌーラリーと云つて靴の下底が始末の付け様

もないと云うのである。然し甲州人は之を逆用して、そうではない甲州人は、人種がおとなしく、無頓着だから富士郡へ行くと右の様な始末になり易いから「甲州人は牛の糞に気を付けよ」と云う訳だと弁解するのである。誰か鳥の雌雄を知るものぞ。こんな話を書く鶴田定平大人など苦情を申出るかも知れぬが同君などは例外第1号だから御安心して可也です。大分話が末の方へ行つて糞語りになったから、この辺で前がきを終つて次号二人三脚の紀行文に移ろう。(未完)

### 気持のよい話

8月21,2日に岡谷に第10回の製糸夏期大学があり、私も参加した。不振の製糸経営を何とかして打開して行こうと云う意欲を反映して聴講者は堂にあふれ非常に盛況だった。聴講者は全国から馳せ参じた。戦後芳しくない呼名でよばれている製糸業界にこの催しを始めて10年に亘り孤軍奮斗この催しを続けて来た岡村製糸試験所長の熱意と努力には敬服の外はなく、またその功績は大きい。去月下旬岡谷吉田館製糸の工場長小林庄二氏が逝去した。20日に社葬をもつて葬式が行われた。公務の都合上参列が出来なかつたので、御霊前にお参りしようと思ひ、社長吉田諒蔵氏に会いその由を伝えたところ(日製協牧工務部長も同席)49日も過ぎたので遺骨は郷里(東京)へ送つたとのことだった。同氏は更に話を続け、遺族は小さい者が2名と未亡人であるが(長男小学1年)今後会社では御遺族の最後迄お世話してあげて小林君が安心して地下に眠ることが出来るようにしてあげたいとのことでした。私はそれを聞いて思はず唾のみ、眼頭が熱くなり、即座には御札の言葉も出ない程でした。皆さんはなんだこんなことかと思ひでしょう。吉田氏から見れば小林君は一介の使用人である。それぞれの後仕末をすれば会社としては万責任は終つた筈である。それと吉田氏は東京繊維学部御出身の岡谷における重鎮である。普通の考え方からすれば到底考えられないことである。それを前記のような温い扱いをしてくれたことは吉田氏の人柄によるのであり、常人の出来ないことである。吾々同僚としては御札の言葉もないし、また深く敬意を表するのである。また一面から見れば、小林君が短かい生涯ではあつたが吉田館のためにいかに尽力をし、働いて来たかということも想像できるのである。

彼の生前において吉田館の工務成績は附近工場中、常に拔群のものといわれ「工務は吉田館に学べ」といわれていたとも聞いている。このようなことは会社が、技術者を信頼し、技術者また全責任をもつて会社の経営を有利にしようと努力していたからこそ現われたのである。このように両者一体となつて働いていた有様はほんとうに美しく、羨しく、事業成績があがらないことがむしろ不思議な位である。せち辛い今時こんな気持のよい話があるうか。感激の余り筆をとつたのである。

8月24日に母校50周年記念事業計画委員会があつた。異論百出、なかなかまとまらなかつた。どうも近頃の千曲会員の間の気持はピツタリしていないのが感ぜられる。それも母校が蚕糸業を中軸として続いて来た関係で、今この方面が芳しくない地位におかれ、会員の大部分がその框内で仕事をしていることも一原因ではなからうか。時代の流れを大いに考えなければならぬのは一つの事実である。私は仕事の関係で度々岡谷へ行く。岡谷は蚕糸業のメッカであるが今は見るかげもないさびれかたである。只一つ製糸試験所が気をはいているのみである。会員諸兄も他の職業に転じたものが多い。ところが吾々のために集まつて呉れる人々、しかも中堅級の人々はいずれも転向した人々だ。これらの人々が喜んで会合に加わり、蚕糸業にたずさわつている人々と楽しく語り激励もしている。転向した人々はややもすれば母校や千曲会を批判するのであるがこんな気持はどうであるうか。たとえば商家出身で外の職に転じて成功した人が自分の家業を非難するでしょうか。このような人は商家にいても成功する人である。私は第51号の会報で「千曲会員の変わり種」を寄稿したが在岡諸兄のうちにはよくこれにあてはまり、しかも立派な人々がいる。今思い出すままに記して見よう。

昭栄製糸の唯一の織物関係の工場長にM君(糸21)がいる。昨年末製糸工場を閉鎖して現職に転じた、工場閉鎖にあつて彼が従業員や会社に対した態度は実に立派なもので全従業員の非常な好感と賞讃のうちに閉鎖の仕事を終つたことは余りにも有名であり、その詳細は「青年の文化」(社会教育協会発行)にのせられている。今彼はナイロン関係の仕事をしているが、転職以来彼の業績は全くすばらしい。これも彼の人格と実力との現

われて、下諏訪在住1カ年足らずで町の監察委員にあげられていることでもわかる。このM君が千曲会のために先頭にたつて心配して呉れている。Y君(糸20)は中央工業の取締役工場長である。終戦直後この職に転じ莫大な負債を返却して今では下諏訪随一の裕福な工場となつてゐる。非常に人好きのする立派な人格者で、従業員の信頼あつく、日常の起居動作は常に工員と共にしている。千曲会のためには常に先頭にたつて後輩の青年支会長を激励し、指導している。

M君(糸17)は精密機械製作所の社長である。終戦後転向し、小柄だがその手腕は大したもの、多忙の身にもかかわらず千曲会の会合にはかかさず顔を出し、若い会員諸君の面どうを見てくれている。

C君(糸28)は今度副支会長に新任された養命酒会社研究部のホープである。おそらく全国一の若い副支会長であろう。温厚な人格は支会尊敬の的である。何れも突然変異的な存在だが職能を超越した麗わしい心のつながりを見せて呉れている。その他H君(糸19大印刷会社々長)M君(糸16味噌会社重役)等何れも多忙な日常なので会合には顔を出す折りが少ないが、いざという場合には千曲会のために一肌も二肌もぬいでくれる信頼される人々である。こんな工場に先輩の激励支持があるので若いK支会長(糸25)O副支会長(糸25)など安心して会の運営をすることが出来るので運営状態の好調さはおそらく支会随一であろうと私は思う。このように会員全体がほんとうに気持のよい心のつながりをもつてゐることが、ひいては小林君の御遺族に対する吉田氏の立派な扱いを招来した一原因となつたことも否めないことであろう。この他OやS大先輩の陰陽の援助も見逃がせない。事がらこそ違ふが前のこと、後のこと(否両者ともつながりがあるかも知れない)も近頃ほんとうに気持のよい話ではないか。今年は今になつて暑さが加わり、しかも何年ぶりの猛暑とのことだがこのようなことは、とかく千曲会員がモヤモヤしている時全く一ぶくの清涼剤ではあるまいか。あえて筆をとつて会員諸兄にお知らせした次第である。

私もこんなような気持で今後ともやつて行きたいと思う。猛暑の折りから会員諸兄にはいよいよ御自愛御自重されて、それぞれの立場において御活躍されるよう御祈りする。そして会員全体が心のつながりだけは離れさせないように御願ひする次第である。(糸12回 荻原生)

千曲会報

母校創立50周年記念事業計画準備委員会開催

標記の事業計画は昨年来研究を重ねて参りましたが、いまだ結論を得ず、本年度も各位によつて研究が進められ、今秋までに最善最適の計画を樹立すべく8月24日母校会議室において計画準備委員および本部地元幹事等53名出席のもと第1回計画準備拡大委員会が開催された。野口理事長の挨拶に続いて、理事長指名の9名の選考委員による選考の結果、委員長に猪坂直一氏選任され、委員長が議長となり議事進行。副委員長には委員長より山口定治郎氏および母袋忠エ門氏が指名された。

拡大委員会は最初から活潑な論議がかわされ、議長の遠腕により終始緊張のうちに進行した。

理事長より議題に関する経過情勢報告に引き続き、支部試案・個人試案が披露された。

次に主なものを拾つてみる。(発言順)
○ 繊維会館(仮称)を上田市内に建設し、会員の利用を図ると共に市民の利用に供し、会の運営資金を得る。また上田市の計画している上田センターと合流するもの1案である。預金案は老人的な案である。

○ 50周年記念は繊維全体の問題でありこの見地から預金しておいて情勢に即応して共通的な何かをしたい。会館を造つて何になるか。

○ 上田中心あるいは学校のためばかりでなく一般会員に利用面の多いものを望む。投機事業は避けること。

○ 繊維研究振興会なるものを設定し、優秀な研究者あるいは留学生に助成する。本案の特長は日額額に正確なワクを必要としないことである。

○ 財団法人放射線研究所を設け、文部省の附置研究所とする。

○ 人口問題(就職難)と蚕糸業の海外進出を目的として千曲会を中心とした南米養蚕農村ならびに蚕糸研究所を設置する。

○ 学校施設として体育館、宿泊所、寮、新来教官住宅、記念文庫を設ける。

○ 東京にシルクギャラリーのようなものを設置する。また色染科新設に努力する。

以上のように議論百出し纏まる気配なく、理事長より次回委員会中学校に密附するものを造るか、千曲会自体のものとするかを決定し、これを小委員会に委任する旨の発言があり、9月28日再び拡大委員会を開催することに意見一致し、この旨各支部に連絡した。

なお本日の出席者は次の通りである。
武田一好(埼玉) 山本岩三郎(東京)
萩野喜次(神奈川) 白井要範(福井)
中村 広(北佐久) 野沢司馬作(南佐久)
井沢喜三(上小) 島倉啓造(諏訪)
降旗 孝(静岡) 篠田平三郎(三重)
大田良信(三井) 猪坂直一(上小)
大山 融(北佐久) 香山清和(上小)
桜井吉利(更埴) 斎藤義臣(東京)
清水良一(東京) 宮前邦雄(東京)
宮城 博(北信) 山崎 寿(安筑)
北条五郎右エ門(上小) 中島 退(学内)
萩原清治(学内) 田口亮平(学内)
町田 博(学内) 野口新太郎(学内)
山口定次郎(学内) 佐藤 一(上小)
母袋忠右エ門(上小) 椎水 茂(群馬)
竹内善吾(上小) 伊藤要次郎(上小)

小出倫平(更埴) 笠原義昭(上小)
宮島国雄(上小) 川上保人(上小)
市川文雄(上小)

以下学内、蒲生俊興、林貞三、八木誠政、倉沢美徳、小林尚一、関博夫、坂口育三、竹田寛、松尾卓見、今井甲子男、中原武木藤半平、石川博、桜井善雄、三石賢、清水周。

母校お楽しみ

関東甲信越大学体育大会開催

信州大学主催で8月30・31、9月1日の3日間盛大に挙行された。参加者は11大学2,500名の学生で15種目に亘つて行われたが信州大学は体操に優勝し、バスケット・水泳等に優秀な成績をおさめた。

9月6日

井上柳梧先生は長野県短期大学々長として、同学の基礎をかためられ、大きな功績を残されたが、今回御退官される事になったので、先生を囲んで学内有志の方々の慰労懇親会が開催された。岡佐藤先生の特別参加もあつて約30名。楽しい和やかな一夕を過ぎた。

本会日誌

8月24日 母校50周年記念事業計画準備委員会開催、詳細については別掲記事参照せられたい。

9月8日 東信千曲教育研究会第1回総会、来会者数十名、母校大平教授のアイゼニンの研究過程について講演を聞く。終了後懇親会を行う。伊藤学部長野口理事長をはじめ、母校の先生方も多数臨席された。

9月9日 50周年記念事業に対する、学内会員の研究総会を開催、本問題に対する学内の意見交換を行つた。

窪田潤教授御退官記念資金決算書

記念会発起人代表

林 貞三・柳沢延房・萩原清治

窪田先生が昨年5月御病気のため、御退官となりましたことはまことに惜しんでも余りある次第であります。早速有志相図り、多数のかたがたに発起人として御参調を煩わして記念会を組織し、先生を幾分なりともお慰めし、あわせて、惜別の意を表したく8月号千曲会報に募金の趣意を發表いたしましたところ、多数の会員ならびに関係者から多額の御繰出をいただき、幸に所期の成果をおさめることができました。御繰出者はその都度会報に發表して参りましたが、ここに8月末日をもつて一応取りまとめることといたしました。決算は下記の通りであります。

資金贈呈の方法については、われら代表にお任せ下さい。以上決算の報告を申し上げますと同時に、発起人として御参調下さつた各位ならびに、御繰金下さつた会員各位の御協力を感謝申し上げます。

Table with 2 columns: 決算書 (Financial Statement) and 金額 (Amount). Rows include 収入 (Income) 47,200円, 支出 (Expenditure) 1,300円, 内訳 (Breakdown) with sub-items like 通信費 (Communication fee) 200, 事務費 (Office fee) 600, 雑費 (Miscellaneous) 500, and 差引 (Balance) 45,900 (贈呈額).

# 会 員 近 況

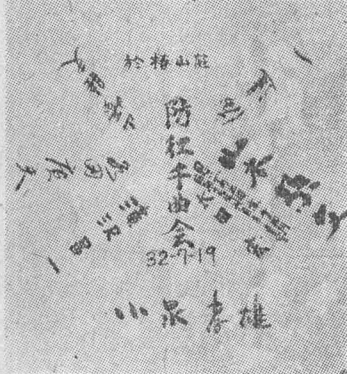
## 防 衛 千 曲 会

兎角の論議的になる自衛隊も自力防衛の線に沿い着々充実される今日此の頃各地の自衛隊で活躍する諸兄も相当数にのぼるものと推察されます。

東京霞ヶ関の1角防衛本庁にも繊維関係調達及び研究に携つて居るもの8名の多きに達しました。

この面々乏しき懐をたたいて酷暑の一夕、せめてもの涼を求め城北は小石川螢狩で有名となっている棒山荘別館に懇親の席を設け、題して第3回防衛千曲会、その一端を御紹介致します。

当庁繊維関係の大御所会長 滝沢昌一(蚕) 繊維皮革班長を筆頭に、温厚誠実そのものの技術研究所の太田宏一等陸尉(糸) 名幹事山本繁文(化) 技官今日が長子の生産予定日と云われ、奥さんなら



ずして御当人がと思わせる巨腹な永田広夫検査官(化)以下防衛庁ドライ技官群を自認する小泉孝雄(紡大3) 山崎陸夫(紡大3) 渡辺一(紡大4)の面々。

前年湯の町伊東で開かれた防衛千曲会では合するもの5名、1年後の今日ではかくの如き増勢ぶり、防衛千曲会の強力な発展と活動を願うとの会長の挨拶に続いてはビールのお話。繊維産業の発展と繊維製品の装備について論議沸騰する頃永田小泉山崎の三傑の前にたちまちビールの空壇が果々とする。ついで話は母校校門前の煙草屋から展開して滝沢会長の一同を一瞬ハツとさせた予期もせぬ思い出話、山本幹事の微妙な話になり、会は最高潮、時にはドライ族と、ウェットと自称する先輩連との時期おくれドライウェットの論争も結論も出ずにビールのお話と消されてしまい、夜の千曲川、オリエンタル、うな藤と、情緒たつぷりな思い出話に花が咲き、旧懐にふけつたわけです。

酔眼もうろうとした頃、寄せ書の一筆 国粹主義者(?)と自称する山本先輩、難かしい旧字体で“防衛千曲会”と酔筆をふるう。兎角うるさいドライ族の批難をうけて、やむなく略字体の“防衛千曲会”

他に菊地技官(化)、浦山昭二郎二等陸尉の2名は本日都合により参加出来ませんでした。

以上防衛千曲会の近況をお知らせ致しまして暑中御見舞にかえます。

末尾となりましたが防衛庁繊維関係製備品等につきまして御寄付の点が御座いましたらよろしく御指導願ひ度いと思ひます。 32.7.23 (小泉, 山崎記)

## 沖 繩 同 窓 の 近 況

最近色々新聞紙上を賑わしている沖繩にも、現在備瀬氏(紡)、宮城薫氏(蚕)内間仁三氏(糸)、緑間武氏(糸)の諸氏がおり、緑間武氏(旧姓目取真)からの便りによつて、これら同窓の活躍状況がもたらされたので、その一部を御伝え致します。

戦争によつて荒野と化した沖繩復興に直接あずかっている経済界の御歴々数名の中に備瀬、宮城の両氏が含まれており、備瀬氏は現在沖繩全交通網を掌握し従業員1400名で沖繩第2位の資力を有し、宮城氏は光琉サルベージ会社、沖繩酸素、琉球造船その他計8会社を経営夜を日につく活躍ぶりと、勿論内間仁三氏も大会社を経営、まさに昇天のいきおいの事であり、緑間武氏は日頃のマラソンできたえた不撓不屈の精神と針塚精神による努力の結果、現在トラパーチン(大理石)会社、サルベージ関係、製糸工場それに最近では養鶏場を大々的に経営、米軍の鶏肉、鶏卵需要を一手でひきうけようというすごい鼻息を示している。蚕糸関係では片倉KKで戦前同様蚕種製造に成果をあげており、松本片倉蚕繭の船田氏(蚕30)も渡琉したことがあり、産繭額こそは少いが、現地の農業収入を考慮するとき、養蚕は今後沖繩では仲々有望との事である。元來沖繩は台風に見舞われること多く、いわゆる防風林なくしては人家はもたないらしく、これが戦禍により失なわれた今日、桑による防風林を計画すれば一層効果的とは本年春母校を訪れた沖繩相互銀行常務伊渡興光氏の話であり、その時も長野県庁蚕糸課を訪ね

今後沖繩蚕糸業復興にあたり内地の技術者を招き相互に提携したいとの事であった。尙蚕種製造も他社の来島を希望している旨を附記し今後の沖繩同窓各位の1層の発展を期待しつつ納筆する。(青沼)

## し ら ゆ き 会 の こ と

この頃の千曲会報によく白雪会という名前が出る。しかし多くの同窓生はこの会がいかなる目的を持ち何をやる会なのか存じあるまいと思う。

白雪会は東京千曲会の若手会員(昭和12・3年卒以降)が相互の親睦をはかると共に、会員の向上をはかることを目的として昭和29年に結成されたものである。爾來今年で足掛4年になるが、主なる事業といえば、月に一度の定例会合と機関紙の発行である。定例会合の数はすでに数十回と数えるが、こゝでの収穫は何といつても未知の人と親しくなることであり、かつ有益な知識の吸収ができることである。例えば先輩ではこの会の賛助会員となつて頂いている人には松村季美氏、唐沢正平氏、合田信一氏、鈴木教吾氏、宮前邦雄氏、小林運美氏、岩本賢次氏を始め多くの先輩がいる。これらの先輩からいろいろと有益なお話を伺う機会は千曲会の総会では不可能である。また定例会合では、井出一太郎(前農相)小山邦太郎参院議員、吉川久衛代議士の話も承ることができた。

また会員は自己の意見を発表する場としてこの会を利用して大いに自信を持つこともできる。こゝでは失言してもそれ程苦にする必要はない。それは「うちうち」だからである。この会の会合においてヒントを得て大いに自信を持った人もある。白雪会とはこのように大いに自己の向上のために利用するところである。千曲会員の皆様ならどなたでも参会されることを歓迎する。本年の定例会合は次のとおりですから皆さんの参会を御待ちする。(蚕37 白雪会々長 宮下久吉)

- 9月16日(月)午後5時半より2時間位
- 10月15日(火) "
- 11月15日(金) "
- 12月16日(月) "

場所 台東区浅草田原町8  
唐木田ビル3階  
於 千曲会東京事務所

## 編 集 後 記

例年のことながら4年生には求人申込がチラホラ見受けられるようになりました。

今月号は会員の活躍情勢に編集の重点をおきましたので、学生生活の最後を飾るべく日夜努力している学生諸君はもちろん会員の皆様も奮起勉勵し、ますます斯界に貢献されますよう編集部は望んでいます。

最近めつきり海外渡航者が増えてきたことは喜ばしい限りですが、外遊者に限らず、多くの人が知つて参考になることは進んでご投稿下さるなり、お近くの方がご紹介されるなりして、兄弟である会員は相互に喜怒哀楽を分かち合おうではありませんか。これこそ千曲会発展の一大基盤であると確信します。(清水記)

編集理事 田口亮平

編集総務 小山長雄

部員 石川博, 中原武, 西山久雄, 美濟津利正, 柳沢幸男, 清水周,